

## 第7回 SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2010

SKIP CITY INTERNATIONAL D-Cinema FESTIVAL 2010



# SKIPシティ国際 Dシネマ映画祭2010

7月23日(金)  
→8月1日(日)

SKIP CITY  
**IDCF**  
INTERNATIONAL  
Digital  
Cinema  
FESTIVAL

オートレース  
Auto Race  
http://www.otsu-racing.com.jp  
JCR&O 株式会社  
JCR&O CULTURE

中山 秀一

夏恒例の「SKIP シティ国際 D シネマ映画祭 2010」が、埼玉県川口市にある総合映像施設「SKIP シティ」で、7月23日から8月1日までの10日間にわたり開催された。この映画祭の特徴は、撮影から上映素材までの全プロセスを、デジタルで行っていることが、コンペティション部門の絶対条件であり、その点で、数ある映画祭のなかでも唯一の映画祭である。

今回の上映作品は、長編部門が13本、その内10本が海外作品、3本が国内作品である。海外作品は、韓国、オーストラリア、フィリピン、イラン・フランス、中国、カナダ、ノルウェー、イタリア、イラク・トルコ、ロシア、というように国際的であるが、今年はアメリカの作品が見当たらない。

なお、短編部門は国内作品のみで、10本の作品を3ブロックに別けて上映した。

この映画祭の魅力は、第一にデジタル制作に限定していることである。筆者は元来フィルム時代からのカメラマン出身なのだが、フィルムを使わなくても映画の製作ができるという、デジタルシネマには特別な関心を持っている。この映画祭を取材することで、毎年デジタルシネマの可能性が進化するのを、肌で感じている。

もう一つは、特に海外作品の場合、広く世界の各地から応募しているため、作品はそれぞれが異なる文化を持っている。作品からそれらの異文化や、難しい国情にも接

することができるのは、大きな驚きである。

しかもそれらの作品は、日本で上映される機会が少ないことも事実で、その意味では、この映画祭は貴重な機会である。日本でも、これらの作品が上映できる環境が整うことを切望する次第だ。(今回監督賞を受賞した『透析』は来年に日本での公開が決まった)

### ☆映画祭の構成

長編のコンペ部門として、合計13本のノミネート作品が上映されるが、長編部門では、海外作品と国内作品とは区別がなく、同一の条件で審査が行なわれる。さらに、恒例として、招待作品などの特別上映が行なわれる。長編部門は、世界85の地域から、なんと648本もの作品が応募しており、過去最高の数だということだ。ちなみに、この膨大な作品から13本のノミネート作品を選ぶには、一次選考として12人の審査員が、3ヶ月を費やして絞り込んだということで、審査員の苦勞が目に見えるようである。

このほかに短編のコンペ部門があり、今回の応募数は、162本で、その中から厳選された10本が上映される。

### ☆審査員

長編部門の審査員は4名で、日本人が男性女性各1名、アメリカ人女性が1名、イ

ギリス・アメリカ人の男性が1名で、下記のとおりである。

○増田久雄 (審査委員長)

(株式会社ブルミエ・インターナショナル代表取締役プロデューサー、監督)

○富永理生子

(東映株式会社 企画製作部プロデューサー)

○ヴィッキー・シゲクニ・ウォン (女性)

(プロデューサー / アメリカ) UCLA 卒業

○ロジャー・ガルシア (プロデューサー、映画評論家 / イギリス・アメリカ)

短編部門の審査員は、女性1名を含む3名で、すべて日本人。

○榎井省志 (審査委員長)

(株式会社アルタミラピクチャーズ代表取締役社長、プロデューサー)

○襟川クロ (映画パーソナリティ)

○佐野史郎 (俳優・監督)

### ☆受賞作品

次に、受賞作品を紹介して、筆者の感想を述べたい。

#### 【長編部門 (国際コンペティション)】

##### ○最優秀作品賞

『やがて来たる者 (原題)』(ジョルジョ・ディリッティ監督 / イタリア / 118分)

この作品は、1944年、イタリア中部マルツァボットの村で実際に起きた、ナチスSSによる、村民無差別虐殺事件をドラマ化した感動的な作品である。



©Cosimo Fiore

長編部門最優秀作品賞を受賞した『やがて来たる者』と、挨拶をするプロデューサー、シモーネ・バキエニ氏



©3C FILMS CO.LTD

長編部門監督賞を受賞した『透析 (原題)』と、挨拶をする監督、リウ・ジェ氏



第二次大戦の末期、いち早く連合軍に降伏したイタリアに、同盟国であるドイツが侵攻し、イタリア各地でパルチザン狩りをしていた状況下での実話が原作である。

村人が全滅した惨劇のなかで、ひとり、機転のきく少女マルティーナが、自分の弟である乳飲み子を助けて共に生き残った。実はこの少女、数年前に愛する弟が生後間もなく死亡して以来、そのショックで失語症になっている。

現在母親は妊娠しており、繰り返されるナチの攻撃のさなか、緊迫した状況下で、少女が待ち望んでいた男の子を出産する。少女は乳飲み子を抱えて、山に避難するなど、機転をきかせて赤ん坊の命を守っている。そしてナチによる悲惨な村民皆殺しにあうのだが、少女と赤ん坊は奇跡的に助かる。

ラストシーンは、少女が幼児を抱いて、横たわる倒木に腰掛け、小声で子守唄を歌いながら遠くを見据える姿で終わる。失語症になっていた少女が、なんと声を出したのだ。その可愛いくて、利発な凛々しい少女の姿は感動的で、これから力強く生きる希望を観客に感じさせる。

この映画は、イタリア中部の村が舞台だが、同様の状況下、ローマでのパルチザン対ナチスの戦いを描いた、歴史的な名作『無防備都市』（1945年）がある。こちらはドキュメンタリータッチの作風だが、今回の『やがて来たる者』は映像がきれいでドラマ性が高いように思えた。

#### ○監督賞

『透析（原題）』【中国】監督：リウ・ジエ

これも素晴らしい作品であった。1997年、中国北部の小さな町で起きた出来事を題材にしている。この町の裁判所で、死刑判決を出した裁判長の、心の葛藤を描いた重厚な社会派ドラマである。

この町の有力企業の金持ち社長が末期の腎臓病で、死刑囚の腎臓を金で買うことを

持ちかけ、実現しそうになる。しかし、死刑執行直前に、法律の改正で執行が中止となってしまふ。苦悩に満ちていた裁判長の表情に、はじめて明るさが戻る。

この事件では、車を2台盗んだ罪で、裁判長が死刑の判決を下す。当時の中国では、この程度の窃盗犯でも死刑になるという時代である。映画では、腎臓病の金持ち男から雇われた弁護士が、死刑囚に腎臓を提供すると家族に金が入るから親孝行になると持ちかけて押印を押させる。

ところが、新しい法律が施行されて、この窃盗犯は死刑を免れることになった。病院から腎臓摘出の車とスタッフが待機するなか、公開銃殺刑の現場で、処刑直前に、裁判長ティエンは処刑の取りやめを命じて、死刑囚の命が救われた。

このようなストーリーで、腎臓を金で買い取るために暗躍する悪徳弁護士など、あらゆる伏線を配してあり、巧みで緻密な演出と相まって、緊迫感を維持しているのはさすがの演出力だ。

この主人公である裁判長ティエンは、娘を盗難車によるひき逃げ事件で亡くしており、妻は精神的に落ち込んで、食事を作る気力もなく、夕食は帰宅後のティエンが作っている。その食卓は会話もなく、まことに暗い構図が、何回となく繰り返し映しだされて観客の心に焼きつく。

最後の場面も同じ食卓の同じ構図で、「私はまだ子どもを生める身体なので、また子どもを生みましょう」という妻の言葉に、裁判長は初めて希望が見える微笑みを浮かべ、食卓の雰囲気少し明るくなるという、しみりとしたラストシーンである。

リウ・ジエ監督は、日本の小津安二郎監督を尊敬しているということである。作品の内容から見ても当然だが、全編にわたり静的なショットの連続で、なるほど小津調だと頷ける作品である。

この作品の映像は、全体にグレーを基調として、色の彩度を殺したローキーのトーンで統一しており、映画の重厚な内容を効果的に表現している。これもデジタルだからこそ容易にできた映像効果に違いない。なお、タイトルの『透析』という文字は、この映画の重要なキーとなっている、金持ち男の“腎臓透析”を意味しているが、中国では「よく考えてみよう」という意味でもあると、監督は解説している。よくこの映画の意味を表現しているタイトルだ。

#### ○脚本賞

『鉄屑と海と子どもたち』【フィリピン】監督：ラルストン・G・ホベル

マニラ湾の海に潜って鉄屑を拾い、家族の生活の足しにしている“Bakal Boys”と呼ばれる少年たち。貧しさの中でも、仲間と共に、力強く明るく生きる子どもたちの切ない友情物語りだ。

フィリピンの貧困問題は、不謹慎な言い方だが、よく映画の題材になる。2007年の当映画祭でノミネートされた『マリアのへそ』は、マニラのスラム街で路上生活をする一家を、かわいい少女マリアを主人公に描いたドラマで、家族思いの心温まる作品であった。

今回の作品は、マニラ湾に沈んでいる鉄屑を拾って回収業者に売り、いくらかの金を得て、貯金をしている子どもたちが主人公だ。彼らは集団で情報を交換しながら、鉄屑を拾いに潜っている。

そのリーダー格の少年ウトイは、あるとき、海底に沈む錨を発見、重量があるので金になるはずだ。みなで協力してようやく引き上げに成功、なじみの廃品回収業者に売りに行くが、親友ブンガルの姿が見えないことに気付く。必死に探すが見当たらず、親友を失ったことを悲しむウトイは、夜の海に入り何者かに招かれるように、闇に消えてゆく、悲しい暗示で終わる。



© Copyright Bakal Boys 2009 長編部門脚本賞を受賞した『鉄屑と海と子どもたち』と、挨拶をする監督、ラルストン・G・ホベル氏

© Avenue B productions 長編部門審査員特別賞を受賞した『テヘラン』と、挨拶をする監督、ナディール・T・ホマユン氏



©Cinepazoo & Helpless Lunch 長編部門SKIPシティアワードを受賞した『seesaw』と、受賞の挨拶をする監督、完山京洪氏



短編部門の最優秀作品賞を受賞した『隣人ランチマン』と、受賞の挨拶をする監督、壇 拓磨氏



この子どもたちは、実に自然に、しかも気の効いたセリフを、楽しそうに交わしているのには驚かされる。監督はQ&Aで、彼らは全員、実際の“Bakal Boys”の中から、オーディションで選んだ少年たちだと、説明した。そして、あの気の効いたセリフは台本にあるのだが、すべて口伝で伝えたと、何となれば、彼らの中には文字の読めない子がいたからだという解説であった。

それにしても、彼らの家庭での生活ぶりを見ると、貧しくとも助け合って賢明に生きる姿には、悲惨さのようなものが感じられない。これは監督の腕だと思う。

○審査員特別賞

『テヘラン』【イラン・フランス】監督：ナデル・T・ホマユン

イランの首都テヘランの、貧困、無法、危険を題材にしている。あらゆるものが金で売り買いされる「なんでもあり」の大都会の暗部を描いた衝撃的なフィクション。

この映画は、テヘランの街なかで、渋滞の車の列を縫いながら、赤ん坊を抱いて物乞いをする、壮年男のシーンから始まる。この男の名はイブラハムといい、故郷に身重の妻を残して、一旗上げようと、この大都会テヘランにやってきたのだ。彼は友人二人のアパートに同居して世話になりながら、裏の組織から赤ん坊をレンタルで借り、街のあちこちに物乞いをして歩き、金を得ているというわけだ。

ある日、イブラハムが所要で外出のため、同居の若い友人に赤ん坊を預けて留守にし

た。ふとしたことから赤ん坊を抱いた若者は、公園で出会ったスカーフ姿のすごい美人に、色仕掛けで誘われた。

女に赤ん坊を抱かせてホテルを探しまわる僅かの際に、大事な赤ん坊を女に持ち逃げされてしまう。実はこの女はプロの街娼で、さっそく、この赤ん坊を売り飛ばそうと歩き回る。しかし結局、この赤ん坊のレンタル屋の闇組織にたどり着き、そこで買い戻してもらおうとするが、逆に脅かされて、赤ん坊だけ巻き上げられ、あげくに金も払ってもらえず追い返されてしまう。

なんとも凄まじい、何でもありの裏世界である。イブラヒムは青くなって、友人たちも協力し、その娼婦を探し回るが、赤ん坊も娼婦も行方がわからない。結局レンタル赤ん坊の組織が、この次第を知って、逆にイブラハムたちを脅しにかかる、という事態になる。そしてイブラハムは、多額の赤ん坊代金を請求される羽目になり、途方に暮れることになる。心配して身重の妻も駆けつけるが、この映画は冷酷にも、衝撃の大悲劇に終わる結末になる。

この作品のナデル・T・ホマユン監督は、パリ在住のイラン人で、度々イランに帰国し、故国イランの首都テヘランの現状を、何とか映画にしたいと考えていた。映画の中で、テヘランの街を自由に歩かまわれる職業として、警官か物乞いを考えたが、結局赤ん坊を道具に物乞いをする主人公を設定したという。

冒頭の物乞いをするシーンは、実際の俳

優にやらせて隠し撮りをしたのだが、ほんとに金をくれる人が多くいたという。金持ちよりも中産階級が金をくれるそうだ。

この作品の撮影は、すべて、パナソニックの手のひらかメラ（ハンドヘルド）を使用したので、人知れず撮影することが出来た、「デジタルこそが、この作品を可能にした」と監督はデジタルの威力を語っている。

さらに、この小型デジタルカメラの効用として、テヘランでは、35ミリの映画撮影は許可にならないが、このようなデジタルカメラだと、許可なしで撮影できるのだと、テヘランでのロケ事情を語った。

デジタルといえば、この作品は、全体の画調を、やや黒つぶれのトーンで統一し、大都会の闇社会の雰囲気効果を効果的に表現している。このトーンの加工は、ポストプロの段階で処理したということだ、これもデジタルならではの効用である。

この作品の、もうひとつの見どころは、同居している3人の男の友情である。3人それぞれに三様のキャラクターが設定されており、赤ん坊を持ち逃げされるお人好しで若い男、そして、小柄だが知恵がまわり、いざという時に機転を利かす男、という具合である。監督は、イラン人が持つ友情、ヒューマニティに監督自身が感銘を受けていると、イラン人の友情を強調している。

○SKIPシティアワード

『seesaw』【日本】監督：完山京洪

都会の空気感をかもし出す独自の映像と全編即興で描く、男と女の今。



短編部門奨励賞を受賞した『家族デッキ』と、受賞の挨拶をする監督、村田朋泰氏



©Isao Kusakari 短編部門奨励賞を受賞した『ゴリラの嘘』と、受賞の挨拶をする監督、草苺 勲氏





表彰式で、総評を報告する増田久雄審査委員長



表彰式が終わり、受賞者たちが揃って記念撮影



今年の映画祭が終わり、受賞者への声援と、名残りを惜しむ観客たち



俳優仲間だった友人が結婚を決めたことに影響を受け、伸司は真琴との結婚を意識し始めていた。教師の仕事で精一杯の真琴は「このままでいい」と思っていたある日、妊娠の兆候が現れてしまう。(プログラムより転載)

### 【短編部門 (国内コンペティション)】

#### ○最優秀作品賞

『隣人ルサンチマン』 監督：壇 拓磨

バイトをしながら、就職活動中のマサキは、アパートの壁一枚を隔てた隣人家族から、児童虐待らしき少女の泣き声が聞こえて心を痛める。バイトの同僚と相談して、児童相談所に通報したが、例によって協力が得られない。

ある日、意を決して、偽造名刺を作り、児童相談所の職員になりすまして隣家に乗り込むが、失敗してしまう。後に残るのは無力感と敗北感であった。

テレビのワイドショーで、話題が絶えない児童虐待のニュース、この問題に題材をとった着想と、若者が社会に関心を持つという点に共感できる。ルサンチマンとはよくつけたタイトルだ。

#### ○奨励賞

『家族デッキ』 監督：村田朋泰

東京下町で床屋を営む高田家を中心に、日常の様々な出来事を重ねて、都会の片隅に住む家族をグラフィティ風に、クレイアニメで丹念に描いている。筆者には、やや観念的で難解に感じられた。

『ゴリラの嘘』 監督：草苺 勲

振り込め詐欺を題材にしたコメディ、嘘をつくほうが、嘘でだまされてしまうという、どんでん返しの結末が爆笑もの。

これも、振り込め詐欺という、決して絶えることがない社会現象を、短編の題材にした着想が大変によかった。さらに意外な落ちを最後に付けるというアイデアが、すごく新鮮だ。筆者も大いに楽しませてもら

い、若者の映画にも、このような作品が出たことに希望を感じた次第だ。

### ☆審査委員の講評

長編部門の増田久雄国際審査委員長は総評で、グランプリを受賞した『やがて来たる者 (原題)』は、見終わったあとに、純粹にいい映画だったと思える作品だと述べた。さらに、審査員特別賞では、『闇への一步』と『テヘラン』が審査で拮抗したこと、グランプリの『やがて来たる者』は観客からのアンケートでも高い評価を得たことを報告した。

また、増田委員長は、一般的に映画祭では、社会性を持った作品が受賞しやすい傾向にある、ということも述べた。それに関連して、映画祭では評価されにくいファンタジー作品『マジックシルバー』の完成度が高く、映画市場の小さいノルウェーで、このような作品が作られていることに、感銘を受けたことを報告した。そして、日本の作品と海外の作品には、テクニク的に差があったという感想も述べた。

筆者は、カメラマン出身で映画評論家ではないが、一介の映画ファンとして、増田委員長の、総評報告には全く同感を覚えた。今年のノミネート作品は、偶然の結果なのか、戦争の悲惨さ、貧困、因習、司法など、社会問題をテーマにした作品が多かった。

審査員特別賞の審査が拮抗したという『テヘラン』の受賞は当然としても、選外になった『闇への一步』も、素晴らしい作品だと思う。両作品は構成こそ異なるが、テーマには、政情環境という点で、双方に共通した要素が感じられる。

日本の作品レベルについては、筆者も同感である。それは今年だけの現象ではなく、日本の場合、独立系プロの映画製作の環境にも要因があると思う。独立系の映画は、製作から上映まで、大変に困難な状況だと

聞く。したがって製作予算がなく、結果として作品が貧弱になる、とう悪循環にあることも事実だと思う。

しかし、Dシネマこそ、アイデア次第では、低予算でも、面白い映画を製作できるのは事実だが、デジタルカメラは基礎テクニクがなくても、商品としての撮影ができるかということ、それは間違いである。今回の上映を見ると、海外作品のプロテクニクに比べて、日本の作品は及ばない点が多い。

面白いアイデアを、面白い映画作品に仕上げるには、監督のテクニクと技術スタッフのテクニクが、上手にかみ合っこそ、実現することだと思う。

短編部門では、受賞作品が2本とも、日本で騒がれている社会問題、「児童虐待」と「振り込め詐欺」を題材にしており、受賞結果は共感できるものであった。

榊井省志・短編部門の審査委員長は、総評で、壇監督の『隣人ルサンチマン』を評し、映画にはテーマが必要で、隣に住む児童虐待の家族とのコミュニケーションという、現代のテーマを短い作品の中で完成させた。グランプリにふさわしい、期待したい監督、という報告をした。

なお、襟川クロ審査委員が、セリフが小さくて聞き取れない部分があった、役者とういうのは、聞こえないような小さな声のセリフでも、聞こえるように発声するのが役者の“演技”ではないのか、という意味の苦言を呈されたのは、大変印象に残る。

おわりに、作品に対する筆者の感想や解釈には、筆者個人の思い込みがあるかもしれないが、その点をご容赦いただきたい。

Syuichi Nakayama  
日本映画テレビ技術協会名誉会員